

知られざる郭沫若の諸事について (1) 【サマリー】

齊藤孝治

郭沫若文庫の設置など中日文化研究所とも繋がりが深い中国の文人政治家、郭沫若は、日本に於ける友人の一人であった元自民党代議士の古井喜実に言わせると「今後、郭先生を超える知日家は出ないだろう」と称されるほどの人である。

それもこれも郭沫若が延べにして 20 年もの長きにわたり日本で学生、亡命生活を送ったほか、その間、日本人女性と結ばれ、5 人の子供を設けたことが大きい。

しかしながら郭沫若については、在日期間が日中戦争など暗い時代と複雑に重なり合ったこともあり、あまりにも未知な事柄が多過ぎると言っても過言ではない。

小論「知られざる郭沫若の諸事について」は、とくに未知の「論文」「帰国秘話」「故地」に絞り研究したものである。

一つ目の「論文」は、中国の歴史上、有名な西安事件の勃発直後、郭沫若が文藝春秋社発行の月刊誌「話」（昭和 12 年 2 月号）に執筆した「好敵手 蔣介石を語る」を指している。

北伐中、郭沫若は、蔣介石とは一時期ともに戦った間柄なことから一文の中味は極めてリアルなものの、何故か蔣介石個人に対しては好意、善意にあふれているのだ。

小論では、郭沫若が蔣介石に好意的な背景を含め、当時の「話」編集部の内情にもふれている。

ただ郭沫若の一文は「話」自体が短命なために現在の文藝春秋新社にも保蔵されておらず、郭沫若研究者の間でも知られていない。

二つ目の「帰国秘話」は、日中戦争中、日本と中国でずっと郭沫若に寄り添うように生きた反戦主義者、青山和夫の存在を明らかにしたものである。

青山は、情報収集とその分析のスペシャリストで、彼の力量は蔣介石も高く評価し、日中戦争中、国民政府の対日情報諜報機関「国際問題研究所」の顧問に就けていたほどの人物であった。

青山はまた歴史学者の顔も併せ持ち、著書「東洋歴史讀本」は、郭沫若との繋がりがから何と「アジア・アフリカ図書館」の郭沫若文庫に収蔵されているのだ。

三つ目は、郭沫若のルーツに関することで、郭沫若研究者の間では、郭沫若の五代前にあたる郭有元が 1781 年、福建の寧化（現三明市）から身を立てようと四川の樂山に辿り着き、艱難辛苦の末に定着したことから以後、樂山が郭沫若一族の故地かのように言われている。

しかし実際には、樂山、寧化以前にも悠久たる歴史が延々と続き、その中には唐の玄宗皇帝の頃、異民族出身の節度使、安祿山の乱を鎮圧した唐の武将、郭子儀もいたのである。

郭子儀は、その時の功によって山西の汾陽の地を与えられ、彼は今なお「汾陽王」と称されている。

郭沫若自身も自分が郭子儀の末裔であることは子供の頃から察知しており、「汾陽王孫」と自賛していたのだ。

一族の汾陽から樂山までのロングロードは、実に 1 千年もの長い歳月を要したが、その行程は未だ未解明のままである。

以上のことから分かるように郭沫若研究にはまだまだ未知な部分が多い。（以上）